ひまわり会(人工肛門、人工膀胱の会）の患者さんと共に

遠州病院　病院長　水上　泰延
ひまわり会会長　水谷　要一

当院ではすでに治療を受けた人口肛門・人口膀胱の患者さんが、これから手術を受ける患者さんの不安が少しでも取り除けるように、自らの体験をお話しするボランティアを行っています。そこで「市民・患者の医療参加」のテーマに合致すると考え、発表させていただきました。

私は昭和 62 年 4 月に遠州病院に戻り、消化器外科医として癌の手術に係わってきました。当初直腸癌の手術においては、外科医として癌の根治性を追求することを第一とし、人工肛門造設に関しては、配慮が足りなかったと思います。患者にとっては、人工肛門は一生ものであり、肉体的または精神的に大変な苦痛があり、誰に何処で相談したら良いのか不安が一杯だったと思います。 その当時医師・看護師は人工肛門に対する配慮が乏しく、手術後の指導も全く不十分でした。昭和 62 年 9 月当院ではストマ療法士(ET)よるストマ外来を開設しました。11 月には愛知県にある山下病院に研修に行き、人工肛門造設術について学ぶと共に、山下病院で立ち上げた人工肛門の会の存在を知りました。

これまでストマ保有者はストマからの排泄を他人に知られたくないため、一人で悩み、引きこもっていました。そこで、同じ境遇の人が集まり、悩み事を相談したり、一緒に旅行に行ったりする人工肛門の会を昭和 63 年「ひまわり会」として発足しました。平成元年より年 1 回の総会と一泊旅行を行うようになりました。当初は病院主導で行いました。平成 8 年より人工膀胱の患者さんが加わりました。平成 18 年より会員主導とし、会長を選出し、年会費を徴収して会の運営を行うこととなりました。ひまわり会の会則を設け、オストメイト相互の親睦を図りながら必要な情報交換をし、装具などに関する知識を高めることによって日常生活を快適に過ごすこと、あわせて、早期に社会復帰が出来るよう援助し合うことを目的としました。目的を達成するための活動として、1．オストメイト相互間及び病院職員との親睦会の実施、２．装具やセルフケア、福祉などに関する学習会や情報交換会の実施、３．会員相互扶助、４．オストミーを受けられる患者さんへの相談役、５．オストメイト相互間の弔事を掲げました。

ボランティアを行う患者さん自身が実際に癌や人工膀胱の告知に対して、現実的に捉えることができず、将来への不安が一杯であったことを話してくれました。だからこそ、手術を受ける患者さんに、少しでも不安を取り除いてあげたいという強い気持ちで患者さんによるボランティアが始まりました。その流

れとしては、手術前にひまわり会の会員から話を聞きたいかどうか打診し、希望あれば、外来看護師・病棟看護長より連絡し、日程を合わせて面談をすることとなります。ストマに対する不安に対しては、ズボンを下ろして、実際のストマを見せて話をしています。また、退院後の生活に対しては、旅行などの体験談を話して、普通に日常生活を送れることを話しています。実際に受けた患者さんからは体験談を聞いて、不安が少なからず取り除くことが出来き、手術に臨めたという意見を多く聞きます。

患者さん自らが不安を乗り越えて、ボランティア活動を行って医療に参加してくれているのは誇れることであり、その活動を更に推し進めていただきたいと思っています。